

## 80 歳以上の降圧目標値 140/90mmHg 未満では死亡リスクが上昇

ヨーロッパのガイドラインでは、心筋梗塞や脳卒中の予防のための降圧目標値として、65 歳以上で 140/90mmHg 以下を推奨しているが、高齢の高血圧患者の予後を改善する至適降圧目標値については議論されている。今回の研究では、地域在住の高齢者において、降圧治療により血圧を 140/90mmHg 未満に管理することと、全死亡リスク低下との関連について検討した。

Berlin Initiative Study に 2009 年 11 月～2011 年 6 月に降圧薬を服用していた 70 歳以上の患者 1,628 例(平均年齢 81 歳)を対象に、2016 年 12 月まで血圧値を測定した。収縮期血圧 140mmHg 未満および拡張期血圧 90mmHg 未満を「血圧正常化」、収縮期血圧 140mmHg 以上および拡張期血圧 90mmHg 以上を「非正常化」と定義した。その結果、636 例で血圧の正常化が認められ、469 例が死亡した。解析の結果、正常化血圧は非正常化血圧と比べて、全死亡リスクの上昇と関連がみられた(ハザード比 1.26)。正常化血圧群は非正常化血圧群と比べると、とくに 80 歳以上において死亡リスクが上昇し(ハザード比 1.40)、また、心臓血管イベント既往例で死亡リスクが上昇した(ハザード比 1.61)。70～79 歳や心臓血管イベント非既往例においては、この傾向はみられなかった。

今回の結果から、80 歳以上または心臓血管イベントの既往のある高齢者では、降圧治療で 140mmHg/90mmHg 未満に管理することが死亡リスク上昇と関連する可能性が示唆された。

出典: European Heart Journal. 2019 Feb 25. pii: ehz071.